

2023 年 11 月 26 日（日）「白い馬の騎士 ～飽くなき支配欲求に対して～」

ヨハネの黙示録 6:1-2

1 また、小羊が七つの封印の一つを解いたとき、私が見ていると、四つの生き物の一つが、雷鳴のような声で「行け」と言うのを聞いた。2 そして見ていると、白い馬が現れ、それに乗っている者は、弓を持っていた。彼は冠を与えられ、勝利の上になお勝利を得ようとして出て行った。

【序論】

今日から黙示録 6 章に入ります。本書を学びながら、私の中で次々と未知の世界の扉が開かれていくことを感じています。黙示録から語っていく上で自分に課している課題があるのですが、それは未来的な出来事の予見に留まることなく、今世界で起きている事象にも目を向け、それが終末の時代においてどういう意味を持っているのかを探るということです。無理に答えを出すべきではない面もありますが、歴史的な「雲行き」を注意深く見つつ、それではどう生きるべきかというところにまでメッセージを落とし込んでいくことを目標に取り組んでいます。

【本論】

これまで見てきたのは天上の壮大な礼拝の幻でしたが、ここからは地上にもたらされる終局史的災いの数々が示されていきます。6～16 章の間には、「七」という数字を軸とした三つの大きなまとまりがあります。

七つの封印（6:1～8:5）

七つのラッパ（8:6～11:19）

七つの平鉢（16:1～21）

まずは「七つの封印」を見ていきますが、最初に不思議な四頭の馬が登場します。

本論 1. 白い馬は何を意味するか

また、小羊が七つの封印の一つを解いたとき、私が見ていると、四つの生き物の一つが、雷鳴のような声で「行け」と言うのを聞いた。（6:1）

「四つの生き物」というのは、4～5 章に出てきた、神の玉座の周りを飛びながらひたすら賛美を続けている御使いのような存在です。御使いの中の御使いで、天上において最高位の権威が与えられているのでしょう。その一羽ずつが「馬」に指令を発し、御座の前から出て行かせる。地に何らかの「事」を起こすためです。

そして見ていると、白い馬が現れ、それに乗っている者は、弓を持っていた。彼は冠を与えられ、勝利の上になお勝利を得ようとして出て行った。(6:2)

最初に登場するのが「白い馬」です。「白」という色がここで意味するところは「勝利」ですが、聖書全体では「聖さ」「純粋さ」を表すことも多い。黙示録では天上界の輝きの色として描かれます。さて、この白馬には騎手が乗っており、「弓を持っていた」と言われています。弓は戦いを象徴し、これから兵を引き連れて戦に出ていくことを表している。「勝利の上になお勝利を得ようとして」とありますが、ここでは現在分詞形の動詞が使われており、これまで既に勝利してきた者が継続的に勝利を得ようとしていることが暗示されています。しかも「冠」が与えられているのですから、地上の王的な存在であることが窺われます。

さて、問題になるのが、この白馬に乗った騎手は神の民にとって敵なのか味方なのかということです。「白」というイメージからすると神の側に立っているようにも見えます。しかし、飽くなき支配欲に突き動かされているところから見ると敵側に立っているようにも見えます。この判断は簡単ではありません。この後出てくる三頭の馬との関わりから考えてみましょう。

- ・ すると、火のように赤い馬が現れた。それに乗っている者には、人々が互いに殺し合うようになるために、地上から平和を奪い取る力が与えられた。また、この者には大きな剣が与えられた。(6:4)
- ・ そして見ていると、黒い馬が現れた。それに乗っている者は、手に秤を持っていた。私は、四つの生き物の間から出る声のようなものを聞いた。「小麦—コイニクスを一デナリオン、大麦—コイニクスを一デナリオンとする。オリーブ油とぶどう酒を損なってはならない。」(6:5-6)
- ・ そして見ていると、青白い馬が現れた。それに乗っている者の名は「死」と言い、これに陰府が従っていた。彼らには、剣と飢饉と死と地の獣とによって、地上の四分の一で人々を殺す権威が与えられた。(6:8)

これらの馬に共通しているのは「地に災いをもたらす」ということであり、「赤い馬」は地に流血（内戦または争い）をもたらし、「黒い馬」は地に飢饉をもたらし、「青白い馬」は地に疫病をもたらす。この文脈で見えていくと、「白い馬」も地に災いをもたらす存在と捉えるのが自然な感じがします。

旧約聖書に照らしても見てみましょう。四種類の馬のイメージは、旧約ゼカリヤ書に先に出てきていたのであり（ゼカリヤ 1:8-17、6:1-8）、黙示録では明らかにこの箇所が前提とされています。

私が再び目を上げて見ると、四台の戦車が二つの山の間から出て来た。その山は青銅の山であった。最初の戦車は赤い馬、二番目の戦車は黒い馬が引き、三番目の戦車は白い馬、四番目の戦車はまだら模様の強い馬が引いていた。(ゼカリヤ 6:1-8)

ここに出てくる馬の色は「赤…黒…白…まだら」であり、黙示録と多少の違いがありますが（青白い馬ではなくまだら）、これらは「地に対する神の審きの多様さ」を表しているようです。黙示録の「白い馬」は、他の馬に先立って出て行った、世の終わりに現れる災いの使者。地上にこのような存在が台頭し始めたならば、読者は時を見極めよということでしょう。

本論 2. 支配者の飽くなき支配欲（現代世界の闇）

黙示録を読むとき、本書が書かれた当時の読者がその時代をどう見ていたかという点に注目することが第一に求められます。彼らがこれらの記事を「すぐに起こること」として捉えていたとすると、四頭の馬がもたらす災いがリアルな現実として迫ってきたのではないのでしょうか。ケアードという学者は、黙示録が書かれる前の 35 年間に起きた諸々の事件を列挙して照らし合わせています（佐竹明 上巻 p. 425-426）。

60 年：地震

62 年：ローマが東部戦線でパルテアのヴォログァスによって喫した敗戦

64 年：ローマの大火の後に起こったキリスト者に対する迫害

66 年：四年間に亘って戦われたユダヤ戦争の惨禍

68 年：ネロの自殺とそれに続く四帝乱立の内乱

79 年：ヴェスヴィオスの噴火

92 年：深刻な穀物の飢饉

パルテア人は当時、ローマ帝国の東の国境に住んでいて、主要な武器として弓と矢を用いました。そして、パルテアの戦士たちが白馬に乗っていたことから、今日の記事との関連が見出されると言われます。

しかしながら、それから 2000 年以上の年月が流れましたが世の終わりは未だ訪れてはならず、現代は現代の読み方をしなくてはなりません。それすらも、更に時代が流れたときに同じように言われる可能性があります。

私自身は、「白い馬」に象徴されるところの「支配者の飽くなき支配欲」というものを、現代世界を飲み込みつつある新共産主義になぞらえて見えています。世界中の富が一極集中的に一部の支配者たちの許へと流れ込む仕組みがますます強化されてきており、一般大衆は彼らにとって税金を吸い取るためのゴイム（家畜）でしかありません。中間富裕層を一掃するため、これまで使用されてきた通貨をリセットし、民衆の手元に蓄えられてきた貯金には財産税がかけられ、新しい通貨システムとベーシックインカムによって、庶民は最小限生きていくのに必要なデジタルマネーと食糧が支給される時代がやってこようとしています。マネーのデジタル化の怖いところは、国家に逆らう者の口座は一瞬にして凍結される可能性があるということです。これは、2022 年 2 月にカナダで起きた「フリーダム・コンボイ」に象徴されていますが、コロナワクチンの義務化と非接種者に対する行動制限に反対する人々がおびたしい車両を走らせ首都オタワに向かったことで抗議の意を表したとき、政府がデモ活動に参加している人々の口座凍結を始めたという事件がありました。中国では世界に先んじてマネーのキャッシュレス化がほぼ完成しており、当局は国民のすべてのお金の動きを把握しています。米国のグローバル企業はこれをモデルとし、世界規模の人民支配を目論んで諸国の個人情報収集を続けています。「支配者の飽くなき支配欲」とは、現代ではこのような「デジタルファシズム」という形で現れつつあるとも言えるでしょう。

本論 3. 信徒の群れの前進

さて、ここまで「**白い馬**」について、神に敵対する勢力による地上の民への攻撃という側面で考えてまいりました。しかし、興味深いことに、ある学者がこれを「忠実な信徒の群れ」として捉えている点に少しふれておきたいと思います。この解釈によりますと、キリストの弟子たちは悪との戦いにある意味で既に勝利を得ており、栄冠を戴き、更なる勝利を得るために出て行こうとしているという捉え方になります。この箇所の理解を困難にしているのは、勝利を得る対象が不明瞭である点であり、誰と誰が戦うのかが分からないのです。

さて、先にも述べましたように、私は「**白い馬**」を「世の終わりに現れる災いの使者」と理解しているのですが、キリスト者がこの勢力と見えない戦いを繰り広げているということは事実でしょう。それは悪魔との霊的な戦いです。今後、支配者層の人々が、自分たちの願望を実現するために、戦争、飢饉、疫病といったものを利用してくることが予想できます。それは、「**赤い馬**」「**黒い馬**」「**青白い馬**」の登場に象徴されているからです。巨大な悪の力が世界を濁流で呑み込んでいこうとするとき、私たちは信仰の力で戦うのです。暴力に対して非暴力で応え、圧政の世とは異なる次元、異なる精神構造で生きていく道を切り拓いていきたい。このことを話は「神の国に生きる」という表現で言い表すのですが、これはどのような世の中であつたとしても信仰者に実現させる究極の生き方です。主イエスはローマ帝国の支配下にあるユダヤにおいて、一市民として、さりとてその支配とは全く異なる「神の支配」の下で歩み抜かれました。その人生は常に悪との戦いでありましたが、主はあらゆる企みを見抜き、屈することなく、十字架に至るまで勝利者であられました。この勝利者に従って歩んでいくのがキリスト者であります。そして、その戦いにおいて、「**勝利の上になお勝利を得る**」のです。何者も私たちの信仰を取り去ることはできず、キリストを主とした人生を妨げることはできません。

以上、「**白い馬**」は「神に敵対する勢力による地上の民への攻撃」を表している裏側で、キリストの知恵と力をもってその巨大な勢力と戦い、勝利に勝利を重ねる神の民の姿が隠されているということを語ってまいりました。主イエスを支配することのできた者はこの地に一人もおられません。私たちもこの方を主として、その生き方を学び、主のように生きていくことができるのです。

【結論】

ヨハネの黙示録は、第一に書かれた当時の状況の中でどう解釈されたか、第二に現代の世の現実にあつてどう読まれるべきか、第三に本当の終わりの時にどういうことが起きるかという、三層の歴史観をもって読むべき書です。しかし、第二と第三の時は確実に近づいてきており、いつしかそれが一つとなる日が来るでしょう。どの時代にあつても変わらぬ真理があります。それは、主イエスの勝利は変わらないということ、主の弟子はこの方と共に常に勝利者であり続けるということです。

【祈り】

歴史を統べ治め給うイエス・キリストの父なる神様。この世を支配する者の力は強大であり、我々庶民には到底太刀打ちできないもののように見えます。しかし、主イエスは全く異なる次元における「神の国」の生き方をもって、サタンの頭を踏み砕かれました。私たちにもこの方に従って生きていく道が示されています。地上では本来得られない平安が上より降ってきます。どのような時代にあっても、教会が福音に生き続けることができるよう、力を与えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
あらゆる物事に時を定め、ご自身の目的に従って御言葉を実現させ給う、父なる神の愛、
神の国の支配をもって悪と戦い、十字架に至る神への従順をもって勝利者となり給うた、主
イエス・キリストの恵み、
如何なる世にあっても、主イエスと共にある喜びと平安で満たし給う、聖霊の親しき交わり
が、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。